平成三十一年（二〇一九）三月二十八日発行
『大倉山論集』第六十五輯抜刷
（公益財団法人　大倉精神文化研究所）

日本のロータリー・クラブ誕生と米山梅吉の思想

堀　峰生

日本のロータリー・クラブ誕生と米山梅吉の思想

堀　峰生

目　次

はじめに
一　米山の青年時代の体験
（一）沼津中学校への入学
（二）沼津兵学校と沼津中学校
（三）沼津中学校での体験
二　本多庸一との出会い
三　「新隠居論」の発表
四　ロータリー・クラブとの遭遇
五　米山の事績と思想
（一）三井信託会社設立時における思想
（二）財団法人三井報恩会における米山の事績
（三）青山学院への支援
おわりに

はじめに

米山梅吉は、三井銀行常務取締役時代の一九一四年八月に『実業之日本』で「新隠居論」を発表し、その中で社会各方面の長老に向かって隠居を勧めると共に、「社会公衆の為にする所が無くては人間としての義務を十分に盡したことにはならない。」と説いている。

その三年後の一九一七年一〇月、米山は日本帝国政府特派財政経済委員の遣米財政問題調査団の一員として渡米した際、ロータリー・クラブのゲストとして出席したことがきっかけでロータリー・クラブを知ることとなる。「新隠居論」に見られる米山の当時の日本実業界の商道徳への批判がロータリー・クラブの「奉仕の精神」に触発され、米山を日本のロータリー・クラブ創設へと動かすこととなった。一九二〇年一〇月、米山は日本で最初のロータリー・クラブである「東京ロータリー・倶楽部」を創設し、初代会長に就任している。帰国後米山が日本でのロータリー・クラブ設立に関わるようになった要因は、米山がロータリー・クラブの「奉仕の精神」に共鳴したことにあった。米山にとって、当時の実業界の商道徳を鑑みる時、日本も倫理的・道徳的な経済社会を創らなければならないという思いが、ロータリー・クラブを設立する動機となったのではないかとされている[1]。

米山は、米国で発展していた信託業務にロータリー・クラブと同様の「奉仕の精神」を見出すことによって信託会社設立の社会的意義を唱えて、一九二四年本邦初の信託会社である三井信託会社を創設した。また、財閥の利益独占批判を受けて当時の三井合名常務理事池田成彬が主導した「財閥の転向」の一環として一九三四年に三井報恩会が設立されると、米山は理事長に就任し社会・文化事業、福祉事業等に尽力している。

本稿では、ロータリー・クラブの精神に共鳴した米山の精神的土壌が生まれた要因について、米山が影響を受けたとされる沼津中学校での体験および本多庸一との出会いを中心に考察すると共に米山の事績を通して米山の思想を検証する。

一　米山の青年時代の体験

（一）沼津中学校への入学

米山は、一八六八年二月、大和郡山・高取藩藩主植村家家中和田竹造と伊豆三島神社神官日比谷氏の息女うたの三男として東京・芝田村町に生まれた。一八七二年に父が没すると一家は母の郷里である三島に移り住み、米山は尋常小学校である映雪舎に入学している。映雪舎を優秀な成績で卒業すると一八八一年に沼津中学校に入学した。米山が通った沼津中学校では、どのような教育が行われていたのか。また、米山はどのようなことを体験していたのかについて見ていきたい。

（二）沼津兵学校と沼津中学校

沼津中学校は、静岡藩の士官養成を目的として設立された機関である沼津兵学校付属小学校の流れをくむ学校である。沼津兵学校は、一八六八年、鳥羽・伏見の戦いで幕府軍が敗れた後江原素六が阿部潜と出会い、西洋の学問と訓練に基づく士官養成が必要であるという点で意気投合したことから設立された。同校は、陸軍士官養成を目的として旧幕臣およびその子弟を対象に開校された日本における最初の近代的な学校であった。オランダのライデン大学へ留

学した洋学者として名声の高かった西周を頭取に迎え、旧幕府が培ってきた当代最高の洋学者を一堂に集めたわが国の最高学府であり、明治政府にとって彼らが蓄積してきた学問と人材は、新しい時代の政治を推進していくためには、その力を借りなくてはならない程必要欠くべからざる存在であった。

学校規則である「徳川家兵学校掟書」によれば、沼津兵学校の生徒は資業生と本業生の二等に分かれ、資業生は四年の修業年限を終えた者のうち試験合格者は本業生に進むことができた。カリキュラムについては、外国語は英仏のうちから一つ選択し、その中で会話・文法を修得させるだけでなく、万国地理・万国史、経済・天文を学ばせていたほか、数学では代数と幾何を課していた。予備教育機関として「徳川家兵学校付属小学校」があり、原則としてその課程を終了して試験に合格した者が沼津兵学校に進級するシステムになっていた。本業生は、沼津兵学校の基幹となる士官養成のための専門課程で、歩兵・砲兵・築造の三科から成り、修業年限は三年であった。専門科目として戦法・築造・砲術・軍律・器械学等、軍人としての専門知識や技術およびその基礎学をそれぞれの専門の科に応じて修得した。資業生の課程はその予備課程乃至基礎課程であったが、単に専門の科についての予備乃至基礎の学習に留まるものではなく、幅広い一般教養・普通学の履習が重視されていた。士官の養成とは言え、単に戦術の専門家の養成を意図したのではなく、その前提としての幅広い視野と豊かな人間性を具備した人間の養成に着目していたことが沼津兵学校の教育の特徴であった。沼津兵学校の設立を企図した阿部潜と江原素六は、鳥羽伏見の戦いで徹底的な敗北を喫した旧幕府軍の、専ら技術の上達のみに重点を置き、学問を顧みない士官養成のあり方を排して一般兵書のほか普通学を教授することの必要性を重視したのである。[2] 普通学を採用したことにより、沼津兵学校は陸軍士官以外の語学や数学を志望する者、後には小学校教員志望者にも門戸を開いていた。[3] 沼津兵学校出身者が単に軍人のみならず、政治・経済・文学・物理学・建築学・実業界等広範な分野にわたって明治期の文化、近代日本の文化の担い手として

活躍することができたのも、陸軍士官の養成に当たって軍事専門家として偏することなく、識見に富む豊かな人間性を備えた人間の育成を図った沼津兵学校の教育方針にあった[4]。東洋的・伝統的教育と西洋的・近代的教育が混在して行われていたのである。沼津兵学校生徒のその後の進学や進路については、軍人、官僚、学者、官立私学の教師、実業家、技術者、新聞記者、画家等と多様であり、また西周（独逸学協会）、江原素六（麻布学園）等の教育者からは、その後学校の設立経営に深く関わった人材を輩出した[5]。

沼津兵学校は、近代日本の黎明期を飾るにふさわしい教育・文化の殿堂であったがために、明治政府の注目するところとなり、一八七〇年兵部省の管轄となり、一八七二年には政府の陸軍兵学寮との統合のため東京に移転となったが、一八七六年沼津兵学校の教育方針の流れをくむ学校として江原素六を中心として沼津中学校と名称を改め復活した。洋風石造二階建ての校舎が建てられ、外国人教師には洋風住宅が用意される等、この地域の文明開化を象徴する存在であった。教科目は、漢学・英語・翻訳書・数学とした。特に英語教育が重視され、高給で外人教師が招聘されていた。沼津中学校では、「西洋事情」「物理階梯」「仏国政体」等欧米の事情のほか西洋医学書が教授される等、ことさらに全世界に目を開いた青年の育成を期した。伝統的な教学を継承する一方で、積極的に欧米の科学や政治思想の教育に努め、近代社会に対処し活動できる中堅的な人材の育成を目指したのである[6]。そのため、広く欧米の教育制度・内容・方法等を積極的に摂取し、時代を切り開く先駆的精神に満ちた人材の養成を意図し、軍人のほか多方面の分野にわたって明治期の指導的人材を世に送った。

（三）沼津中学校での体験

米山は、沼津中学校では初代校長江原素六と教頭名和謙次らによる教育に大いに啓発された。江原は、最下層の幕

臣の出身ではあったが、幕府軍の指揮官として活躍した。その思想は、キリスト教であり自由民権思想であった。江原は、カナダ・メソジストの宣教師ミーチャムを介してキリスト教に出会い受洗している。また、板垣退助を通じて自由民権思想と出会っている。士族授産を超えた殖産興業と徳川家兵学校の枠を超えた人材育成を目指す教育に献身的に尽力したことからも明らかなように、江原にとって、この二つの思想は自身の考え方に近代的変容をもたらした。また、米山を始め沼津中学校の生徒にとっても、キリスト教と自由民権思想という新しい思想の息吹に触れることにもなったのである。当時の様子を米山は次のように記している。

英米の教育学が漸次輸入せられて自由思想の著しく鼓吹され、民権論の如きも亦た盛んになって、有志者は或は国会の開設を促し或は政党を組織して天下囂然たる勢ひであった。板垣退助の如き名士の来りて政談演説会の催さるることなどがあれば、学生は当時之を聴くことを禁じられてゐたので、一旦退校届を投じて此に赴くを常とし、校長を始め教師も知らざる真似をしてゐたと云ふような風であった。[7]

漢文の教師でもあった名和は、生徒にも民権論を広め、観瀾社という演説結社を組織している。[8]米山は、当時の沼津中学校の校風について、「寄宿舎には消燈就眠の時刻を過ぎて尚ほ談論風発を事としたと云ふやうに、何等の拘束なく従て窮屈といふことを知らず、全く校長以下教師の人格と其根柢よりせる武士的精神に薫陶され、生徒は真に能く活機に学ぶことを得たのであった。[9]」と述べている。また、米山は次のようにも述べている。

幕末に於ける西洋文化の流れは一時沼津を新知識の寄港地とした。静岡学問所当時の蔵書の中には『沼津廻し』と印記せられたるが見られ、一旦同地に到着したる書籍類の兵学校より分配されたらんと想像せらるるものあり。斯かる伝統と兵学校を継承せる沼津中学校のありし間は、過去の歴史を慕ひ来り学べる諸生のために一種の感化を齎らしたことで、筆者の如きも生涯去りがたき記憶を此に留むることである。[10]

米山の文学的素養は、特に昌平黌出身で漢籍の造詣が深かった名和謙次から啓発されるところが多かった。生来の好学の志と一生を支配した文学的傾向が培われた。生徒が多くなかったことから、子弟の接触が緊密で個人教授に近かった[11]。米山は、文筆が得意だったことから自ら回覧雑誌を発行して論説や詩文を載せ中学校の同僚を喜ばせた。また、積極性に富んだ米山は、回覧雑誌で満足せず、当時発行されていた『顕才新誌』という青少年憧れの全国誌に投書していた。米山は、「此の投書家の中には後の漱石たるを知る由もなかったが夏目金之助などもゐた。好評をみることでもあれば、鬼の首でも取ったように喜び勇んだ[12]」と述べている。

米山にとって、沼津中学校での体験は西洋の学問を学ぶことの必要性を痛感すると同時に、英語教育を重視した教育環境も手伝って留学への想いを駆り立てる精神的土壌が生まれることになった。

二　本多庸一との出会い

本多庸一（幼名は徳蔵）は、一八四八年津軽藩の上級武士の家に生まれた。父から孝経を学びはじめ、優秀であった本多は藩校稽古館に入学すると大学・中庸・論語・孟子・礼記等の素読コースをマスターした。また、一三歳から稽古館での学問と共に小野派一刀流の剣術を学び、さらには馬術・砲術の修行にも励んだ。その後、朱子学や陽明学に関心が移りこれを熱心に研究している。

戊辰戦争が始まると奥羽列藩同盟のために津軽藩の使者として庄内藩に赴き、後に津軽藩が同盟を脱すると本多は悲憤慷慨し信義を主張して同志と共に脱藩を敢行したが、かえってその清節を賞されて罪を許されて帰藩している。

津軽藩では藩中の前途有望な英才を藩費で内地留学のために横浜・長崎・長州等の先進地に派遣したが、一八七一

年本多は二二歳の時横浜に派遣され、英語を修めるためにバラ塾に入り、そこで初めてキリスト教に出会う経験をする。

本多は、一時帰藩したが再び自費で遊学しバラ塾に再入門し、一八七二年バラより洗礼を受けることになった。本多は、藩中のエリート子弟として幼い頃から徹底的に儒教的道徳を叩きこまれていたが、儒教的道徳は内面的な契機を含まない封建的階層制を基礎とする社会の秩序を維持するための社会規範に過ぎなかったことから、本多にとっては儒教的・武士道的規範からキリスト教への回心は可能であった。また、バラ等の当時の宣教師たちは日本の士族の信条と相通じるような真摯剛毅なピューリタニズムの持ち主が多く、日本の武士道精神を認識し、その教養を高く評価していたことで、彼らからの人格的感化も大きかったと考えられる。[13]

本多は弘前に帰京すると廃校となっていた東奥義塾を再興し塾長となり郷土の教育と伝道に従事し、一八七六年には東北最古のプロテスタント教会である弘前教会を設立し初代牧師を兼務した。また、自由民権運動が盛んな頃で地方政界で指導的役割を担った。本多は、一八八二年に青森県議会の補欠選挙に出て当選し、当選を重ねて一八八六年まで県会議員を務めている。

本多は、一八八八年九月米国に渡り一八九〇年六月まで米国に滞在している。米国に滞在中に大日本帝国憲法が発布され、第一回衆議院議員総選挙が行われるに当たって、弘前における本多の支持者たちも本多擁立に動き、本多自身も出馬の意向であったが、当時の衆議院議員選挙法では神官、僧侶、牧師等の宗教の教職は被選挙権は制限されていた。本多は政治か宗教かの二者択一を迫られ悩んでいたが、本多の身の上に生涯を方向づける事件が起こった。ある日、ペンシルベニア州スクラントン市の郊外を友人と共に散歩して鉄橋の上で佇んでいると列車が近づいて来た。本多は何か深く想うところがあり列車が間近に来るまで気づかず、危機一髪で枕木に身を伏せて助かった。本多は、

この体験をきっかけにして政界に出ることを辞め、キリスト教の伝道に進むことを決心したと言われている。[14]

一八九〇年、本多は帰国すると東京英和学校の校長に就任し、一八九四年青山学院と改称されると第二代の院長となり一九〇七年まで院長職を務めた。東京英和学校の一学生であった岡田哲蔵は初めて本多に会った時の印象を次のように述べている。

一見してその堂々たる風采と太き音声の雄弁とに感激した。論旨は伝道は人物を要す、然して我等先づ自ら人物とならざるべからずといふにある。同感共鳴はいふ迄もない。この重荘なる人物の存在を我等は如何に心強く思ひしことぞ。[15]

本多は、青山学院の院長として在職中に、教育勅語を錦の御旗に国家主義のキリスト教に対する本格的攻撃が始まると、キリスト教は決して教育勅語が示す道徳と相反するものではないことを論旨として反駁している。また、本多はキリスト教に対する風当たりが強まっていた中にあって、日清、日露両戦争を通して積極的に政府の政策に協力した。政府の政策遂行に対して非協力的でないことを、メソジスト教会の維持と青山学院の経営という現実的立場からの対応で示した。本多の行動は、宗教本来の次元というよりも、むしろ現実の政治・社会の枠内での世俗的配慮を必要とする立場からの行動であったとする見方がある。[16]相沢文蔵は、本多について次のように述べている。

日清・日露の両戦争の際の本多のあのような協力も、本多が教会の維持と宗教学校の経営という現実の問題をかかえて、これに対する政治からの圧力を排除し、さらにはそれから好意と便宜を与えられんことを期待してのことではなかったか。（中略）このように甚だ常識的で現実的なゆき方が彼本来の傾向であったと思われる。[17]

米山は一八八六年から一年足らずの間であったが東京英和学校に在学した後、一八八七年から一八九五年まで米国に留学しており、滞米中に本多の薫陶を得ている。米山は、積極的に社会のために尽くそうとする本多の生き方に共

鳴し、本多を師と仰いだ。これが米山の後の活動の原点ともなった。米山は、本多について自著『看雲録』で次のように記述している。

私はこの学校に長く居れず、やがて米国に赴いたが、間もなく本多先生も米国にやって来られ、サンフランシスコに於いて暫くの間、日夜先生から色々と教えをうけ、寧ろ日本に於いては得難い親しみを先生に持つことができた。そして何時もあの温容に対して自由な論談を試みたのである。私は、元来直情径行の人間で、性急の癖は若かった時はなお更であったのであろう。一夜ハリス博士の許で、食後談も尽き、机の上の紙に徒ら書きをしていた間に、先生はさも私の注意をひく如く、『巧遅』と『拙速』の四字を二度も三度も書いて見せるのであった。これはあとになり気付いたことであるが、先生は私に注意し私を訓えられたのであった。私は以来これを忘れたことはなく、事に臨む毎に思い出しては座右の銘としていたのである。[18]

米山が、本多から大いに感化されていたことは、一九二三年一一月に行われた青山学院創立記念会における下記の米山の講演で確認できる。

私は学生諸子に望む、慶應義塾に福沢先生研究会がある如く、学院にも本多先生研究会と云ふやうなものを設くることである。（中略）要するに本多先生は武士道精神に感化され、愛国の精神を以て一貫し、終始、天下国家の為めに其の身を捧げた国士であった。先生を研究するのは歴史を研究することである。[19]

三　「新隠居論」の発表

米山は一九一四年、三井銀行常務取締役在任中の四六歳の時に「新隠居論」を発表した。その中で、実業界の長老

に対して、欧米人のように自分の仕事を早く後輩に譲って市町村自治体の世話や学校・病院その他公益のために尽くし、公共的使命を果たすべきと主張した。米山は、日本の公益的事業は衣食に汲々としている者が経営していることを指摘して、本文で次のように述べている。

余は特に我が実業界の元老に向つて其の名誉と信用とに加ふるに貴重なる経験を以てして、大に各種苦境事業の世話を焼いて貰ひたい。看来れば日本の社会は改善を要する事が澤山ある。公徳を頓と重んぜられず、乱暴狼藉の事が少なくない、社会の弊風を矯正すると云ふ様の事には最も観察注意の行届く、世の所謂隠居者にして始めてやり得ることである。[20]

米山は、日本の公益的事業が乱暴狼藉に扱われていることを嘆き、公徳心のある経験豊富な長老が指導的役割を担うことを主張したのである。米山にとって、当時の日本の公益的事業の実態は不適当な人々によって不当に経営されていたことへの憤りがあった。米山は、数回にわたって欧米出張に出る等、海外事情にも詳しいことから西洋の実業人の実態に照らし合わせての主張であったと考えられる。

四　ロータリー・クラブとの遭遇

米山がロータリー・クラブと出会ったきっかけは一九一七年一〇月三井銀行常務取締役時代に日本帝国政府特派財政経済委員であった頃、遣米財政問題調査団の一員として米国に出張した時であった。三井物産ダラス支店長福島喜三次を訪問した際、福島が会員となっていたロータリー・クラブにゲストとして参加した。日本人として最初のロータリアンとなっていた福島が、帰国後国際ロータリー・クラブ連合会会長から日本にロータリー・クラブを設立して

もらいたいという意向を受けて、米山の協力を得て一九二一年四月発足したのが東京ロータリー・倶楽部である。

ロータリー・クラブは異なった職業の実業人が友愛の精神で広く結合して、まずその道徳水準を高めて自己の利益を第一とする姿勢を改め、専ら社会の福利に貢献するために「奉仕の精神」を基調とするロータリー運動を行う団体である。ロータリー・クラブの精神である「利己のない奉仕」は、米山が本多から学んだ精神である「他人から受けたいと欲するものは、自身からもまた他人に与えよ。」という姿勢と同様であり、米山はロータリー・クラブ精神に共鳴し日本におけるロータリー・クラブ設立に向けて精力的に動いたことは必然であった。米山にとって、ロータリー・クラブとの出会いは、「新隠居論」で主張した持論を確信させ、その後の米山を社会貢献活動の実践へと方向付けることとなった。

五　米山の事績と思想

米山は、「新隠居論」で主張した持論を実業界の長老に説いただけではなく、三井銀行常務を退任すると自ら社会貢献活動を実践している。以下、米山の社会貢献活動を概観する。

（一）三井信託会社設立時における思想

米山は、三井銀行の常務を自らの意思で退任した頃、後進に次のように述懐している。

今日銀行を退いたが、随分永い間銀行人として過ごしてきたものだ、而も自分の志でもなかったのに。既に五十七になったので此侭在職すれば一生を銀行人として終わることになる。今転向すれば、又一仕事世の中に尽くす

ことも出来よう。[21]

米山は、一九二三年八月三井銀行の常務取締役を退任すると、翌年三月には日本で最初の本格的信託会社である三井信託会社（後の三井信託銀行）を創設し社長に就任している。米山は、一九二一年に団琢磨を団長とする英米訪問日本実業団に参加し、米国の最新信託事情を調査しており、三井銀行時代から信託業務には関心があった。特に「公益信託」には深い関心を持っていた。

一九〇五年に担保付社債信託法が制定されたことにより、日本興業銀行や有力大銀行が信託業に係わる免許を取得した。また、一九〇六年には東京信託株式会社をはじめ信託会社が続々設立され、一九二二年には四八八社を数えるに至っている。しかしながら、地方の無尽会社や貸金業者が信託という看板を掲げたものが大多数であったのが実態で、営業内容も雑多であり経営内容は一部の優良会社を除き不健全な会社が多かった。[22]不健全な経営の信託会社を整理し、大資本の信用ある新たな社会奉仕的財産管理運用機関の設立を企図した政府は一九二二年四月に信託法と信託業法を制定した。この信託二法の成立が米山を信託会社設立へと動かしたのである。

米山は、米国で発展していた信託業務に、ロータリー・クラブと同様の奉仕の精神を見出すことによって、本邦初の本格的な信託会社の設立を企図したのである。設立趣意書・定款等を整え、三井家および関係各方面の了解を得て会社設立の実現を見た。米山は、一九二三年の関東大震災の悲惨な事例を目の当たりにして財産管理を使命とする信託会社の必要性を改めて痛感した。[23]

米山は、信託業務を行う上でその理念である「奉仕の精神」の重要性を説いている。三井信託会社第一期入社組でのちに三井信託銀行の社長となった林賢材は、米山について「『信託銀行というものは普通の金融機関とは違うんだ、世間一般に奉仕しなきゃならない機関だ』そういう意味のことをたびたび言われました。[24]」と述べている。また、第

三期入社組で元三井信託銀行社長杉谷武雄は、「"He Profits Most Who Serves Best"というロータリーの標語を引用されて、信託銀行はサービスが仕事で、サービスさえすれば会社は自然に成り立つんだから、諸君は一所懸命お客様にサービスしなさい。これがロータリー精神と合致するというお話を反復されました。[25]」と述べている。

米山は、一九二七年四月に大阪で行われた信託協会第二回定時総会席上において、信託会社の銀行との違いを公共性に求め、次のように述べている。

凡そ営業として信託業務に従ふ信託会社が其の損益を度外視する能はざるは論なしと雖も、斯業は他の一般営利的事業と趣を異にし多分に公共的性質を具有するを以て、業務の執行に当たりては能く其の公共の機関たることを認識し、凡て判断の標準を社会的及道徳的基礎に求め、十二分の権威と確信とを以て信託の面目を張ることに志さざるべからず。[26]

また、一九二八年四月に行われた信託協会第三回定時総会後の晩餐会の席上においては、法制の不備により信託業務として遺言信託を行うことができない現状に触れ、次のように述べている。

遺言の執行と信託とは其の性質上不可分の関係を有するに拘らず、我が法制不備の為め信託会社は遺言執行者たることを得ざる実情にあり、斯の如きは信託の本領を発揮せしむる所以にあらず。是を以て協会は法令の改正を促して之を可能ならしむべく既往に於て最善の努力を致せりと雖も、未だ其の実現を見るに至らず、尚将来に於ても此の目的に向つて全力を傾注せむことを期す。[27]

米山は、全財界による日本全体を基盤とする信託会社の設立を構想していたが、三井信託会社の金銭信託運用収益配当率が銀行定期預金の利率を上回ったことから銀行との摩擦が高まり、他の財閥資本の対抗意識から各財閥ごとに信託会社が設立されてゆくことになった。したがって、米山が企図した財界の総力を結集した超財閥的性格を有する

米山の理想とする単独の信託会社ということにはならなかった。これについて麻島は、

問題は政府が信託会社に予定した役割、すなわち社会奉仕的な財産管理運用機関という性格をめぐって発生する。理念的に設定されたこの役割を前提とした場合、金融機関性を排除することの可否、ことさらに信託会社の営利企業としての成立可能性が問われ、日本における信託業務の発展可能性、信託会社の銀行業兼営にまで問題が拡大せざるをえない。しかし信託会社の性格を社会奉仕的な財産管理運用機関に限定し、可能な限り金融機関性を排除せんとした政府の方針は失敗し、現実の信託会社は金銭信託中心の金融機関として成長を開始した[28]。

としている。

米山は、信託会社が金銭信託残高の順調な伸びに依存して銀行に類似した会社になることに警鐘を鳴らすと共に、信託会社の理念である「奉仕の精神」を実現するために法改正を唱えその実現を図ろうとした。遺言信託等の当時としては不採算が予想される信託業務について敢えて推進を図ろうとしていたことは、米山が信託業務を本業を通じた社会貢献として認識していたことを示す事例である。一九二九年五月、信託業法の一部改正によって米山の念願であった遺言信託業務が許可されている。

(二) 財団法人三井報恩会における米山の事績

昭和期に入ると日本を襲った不況が深刻化し、国民生活に大きな打撃を与えた。三井合名の常務理事であった池田成彬は財閥の利益独占批判を受けて一九三四年三月に「財閥の転向」を主導することになったが、その一環として設立されたのが三井報恩会であった。三井報恩会は、「我邦社会の福利増進並びに文化の向上発展に貢献する事業を経営助成する」ことを目的に設立された。三井報恩会の最初の事業は一〇〇万円を支出してベルギーより塩化ラジウム

を購入し、財団法人癌研究会に設備と共に寄付したことであった。米山は、池田の意向を受けて三井報恩会の理事長に就任し、一九四四年九月に退任するまで社会・文化事業、福祉事業に関わり、企業フィランソロピーのパイオニアとしての活動を行っている。殊に青森から沖縄に至るまで病躯を押してライ病の療養所をくまなく慰問に訪れ実情視察を行い、患者一人ひとりに慰問品を用意したが、その費用は自弁であった。また、岩手県紫波郡彦部村や青森県東津軽郡西平内村といった窮乏農村の振興のために多額の資金援助を行うと共に、農家の経済的な支援として彦部村には豪州から緬羊を輸入し飼育技術指導を行って増殖の奨励を図った。さらには、結核に対する化学療法特効薬が発見されていない時に、米山は、重要国策の一つであるとして化学療法研究会創立に協力し、創立諸費用のみならず経常費に至るまで全額を支出して助成した。[29] その他三井報恩会の社会事業は広範にわたり、児童保護事業や養老院を新設したほか中央社会事業協会・社会事業研究所を助成して設立した。

三井報恩会設立の狙いは、財閥批判を交わすための偽装であるとする見方もある。[30] しかし、米山の三井報恩会理事長としての活動を見ると、米山にとっては「新隠居論」で長老の社会貢献を説いた持論の実践であり、純粋に米山自身の信念に基づいた行動であったと認められる。

（三）青山学院への支援

米山が青山学院の支援活動に関わるようになったのは一九一三年、青山学院財団理事会の初代理事に三井銀行の間島弟彦らと共に任命されたことに始まる。そして、米山は間島が亡くなった後の一九二一年に青山学院校友会長を引き受けている。一九二三年の関東大震災後、全米メソジスト教会からの寄付金を基礎として、校友の復興運動の委員長として校友会員の中から財界の有力者を中心に協力を取り付けて、学院の基本金募集を率先して行った。[31]

青山学院の主義や精神に基づく教育を初等教育の段階から始めたいという当時の阿部義宗院長の意向を受けて、米山は初等部の建設にも精魂を打ち込み、莫大な金額の私財を投じて完成させている。米山の奉仕に対する並々ならない情熱の現れを見てとれる。

米山の教育における理想は、キリスト教教育と英語による国際人の育成であった。青山学院緑岡小学校の校長として米山が児童に繰り返し説いた校訓は、「人からされて嬉しかった事は、人にもそのようにしなさい。人からされていやであった事は、人にもしてはいけない。[32]」という利他の精神であった。

おわりに

米山にとって、沼津中学校時代に受けた先進的な洋学を中心とした学びと江原素六や宣教師からのキリスト教教育さらには当時盛んとなっていた自由民権論等によって感化され育まれていった文才と批判的精神が精神的土壌の原点であった。このような精神的土壌から「新隠居論」が生まれたと考えられる。

米山は、一銀行員として留まることはなかった。もともと米山は米国留学時代から新聞記者になることが夢であった。米山にとって、帰国後就職に苦労した結果銀行員となっていたこともあり、文才にも恵まれていた米山にとって一生を銀行員として終わることは必ずしも本意ではなかったと思われる。

英語を得意としていた米山は銀行員時代に海外事情を調査するため幾度か海外出張を命ぜられることがあり、銀行業務に留まらず海外の様々な先進性に触れる機会に恵まれた。三井銀行常務取締役時代に日本帝国政府特派財政経済委員の遣米財政問題調査団の一員として渡米した際、シカゴにおいてゲストとしてロータリー・クラブに参加したこ

とが、三井銀行常務取締役退任後の米山の活動に影響を与えることとなった。米山は、渡米する約三年前に「新隠居論」を既に発表しており、実業界の悪しき実態を踏まえて、実業界の実績ある長老に対して引退して信用と経験を活用して社会貢献活動に就くことを提唱していた。米国でのロータリー・クラブとの遭遇は、米山にとって「新隠居論」における持論の実践的な道筋を暗示する出会いになったと考えられる。米山は、「新隠居論」の発表をもって実業界の長老に訴えたばかりでなく、三井銀行常務取締役退任後は自ら社会貢献活動を実践した。

留学時代には師と仰ぐようになった国士本多庸一との出会いと感化によってキリスト教精神に基づく「奉仕の精神」が醸成され、ロータリー・クラブの理念である「各自の職務を通じた社会貢献」が、米山の精力的な社会貢献活動に影響を与えた。

米山は、米国で発展していた信託業務に「奉仕の精神」を見出し、日本で最初の本格的信託会社である三井信託会社を創設したほか、三井報恩会が設立されると理事長に就任して社会・文化事業、福祉事業に尽力し企業フィランソロピーのパイオニア的活動を行った。また、短期間であったが多大な影響を受けた青山学院でのキリスト教精神に基づく教育、あるいは本多庸一等キリスト教にまつわる人々からの恩恵への感謝の念から青山学院への支援を行い、さらには自ら財産を投じて青山学院初等部および幼稚園を創設して青山学院の教育発展に貢献した。

米山の「新隠居論」の発表に始まるその後の米山自身による一連の社会貢献活動を概観すると、「新隠居論」は当時の実業界の長老に対して社会貢献活動を促す呼びかけであっただけではなく、自らの実行宣言であったことが判明する。

注

（1）「信託対談シリーズ（四）米山梅吉翁と信託のすすめ」（社団法人信託協会編『信託』二一一号、二〇〇二年）一二～一三頁。
（2）四方一瀰「沼津兵学校と沼津中学校」（学校教育研究所編『学校教育研究所年報』三〇、学校教育研究所、一九八六年）三八頁～三九頁。
（3）熊澤恵里子「沼津兵学校における教育の史的考察―旧幕教育機関の制度改革―」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要　第一分冊』四二、早稲田大学大学院文学研究科、一九九六年）一六八頁。
（4）前掲注2「沼津兵学校と沼津中学校」三九頁。
（5）宇野美恵子「西周の教育思想における東西思想の出会い」（島根県立大学北東アジア地域研究センター編『北東アジア研究』一四・一五、島根県立大学北東アジア地域研究センター、二〇〇八年）一五頁。
（6）前掲注2「沼津兵学校と沼津中学校」四三頁。
（7）米山梅吉『幕末西洋文化と沼津兵学校』（三省堂、一九三五年）一三四頁。
（8）樋口雄彦『旧幕臣の明治維新―沼津兵学校とその群像』（吉川弘文館、二〇〇五年）一六七頁。
（9）前掲注7『幕末西洋文化と沼津兵学校』一三五頁。
（10）同上、一三八～一三九頁。
（11）米山梅吉先生伝記刊行会編『米山梅吉傳』（青山学院初等部、一九六〇年）一八～一九頁。
（12）米山梅吉『常識関門』（実業之日本社、一九五二年）九九頁。
（13）青山学院編『本多庸一』（青山学院、一九六八年）四六～四七頁。
（14）同上、一一八～一一九頁。
（15）岡田哲蔵『本多庸一伝』（日独書院、一九三五年）六九～七〇頁。
（16）前掲注13『本多庸一』二二六頁。

(17) 相沢文蔵「本多庸一論」(『道標』一七、一九六三年)五九頁。
(18) 米山梅吉『看雲録』(千倉書房、一九三八年)一七六～一七七頁。
(19) 同上、一八六～一八七頁。
(20) 米山梅吉「新隠居論」(『実業之日本』一七(一七)、一九一四年八月一五日号)。
(21) 前掲注11『米山梅吉傳』三三三頁。
(22) 堀峰生「米山梅吉の思想―三井信託創業時における米山の経営構想を中心に―」(『経営哲学』一一(二)、経営哲学学会、二〇一四年)五四～五五頁。
(23) 前掲注11『米山梅吉傳』二三〇～二三一頁。
(24) 麻島昭一編著『日本信託業証言集　上巻』(専修大学出版局、二〇〇八年)七六～七七頁。
(25) 同上、八二頁。
(26) 社団法人信託協会編『米山前会長演説集』(一九三六年)四八～四九頁。
(27) 同上、五三～五四頁。
(28) 麻島昭一『日本信託業発展史』(有斐閣、一九六九年)九五～九六頁。
(29) 前掲注11『米山梅吉傳』二六一～二六三頁。
(30) 堀峰生「池田成彬の経営観と三井『改革』」(『企業家研究』第一三号、企業家研究フォーラム、二〇一六年)一～二頁。
(31) 青山学院大学編『青山学院大学五十年史』(二〇一〇年)九三頁。
(32) 前掲注31『青山学院大学五十年史』九五頁。

【編者付記】　本稿は、平成三十年六月十六日の大倉山講演会における「日本のロータリークラブ誕生と米山梅吉の思想」と題した講演の記録を基に、加筆訂正を加えて成稿していただいたものである。